

高村光太郎の書

及川 厚

Atsushi OIKAWA

《第一章》 高村光太郎の家系 — 文学的な血を中心として —

二

光太郎にとって父の存在はあらゆる分野において表現される。「出さず」にしまった手紙の「一束」(明43・7)、「子供の頃」(昭20・2)「父との関係」(昭29・5)などに書かれる幼い日の回想は言うに及ばず。詩「父の顔」(明44・7)や「暗愚小伝」(昭22・6)の中の「反逆」¹、「楠公銅像」²、「御前彫刻」³、「彫刻一途」などにも光太郎の中の父が登場する。彫刻にも、光雲の弟子達からせがまれて作らされた「光雲還暦記念像」(明44)や「光雲一周忌記念像」(昭10)などがある。光太郎の父に対する心の中の思いも様々な形となって現れてくる。詩

の「父の顔」¹には

父の顔を粘土にて作れば

かはたれ時の窓の下に

父の顔の悲しくさびしや

(中略)

父の顔を粘土にて作れば

かはたれ時の窓の下に

あやしき血すぢのささやく声……

とある。引用した部分は、最初の一段と最後の一段である。この「父の顔」は明治四十四年に書かれている。つまり留学後に作られた「光雲還暦記念像」²について述べている。自らが作った父の顔についての詩であるが、その詩の意味するところはかなり深い部分にあると見てよいようである。

「父の顔」¹について吉本隆明氏の『高村光太郎』³の中に

高村光太郎にとって父光雲は血縁のある父であるとともに、芸術の世界で西欧からみられた日本そのものであり、また西欧社会からみられた日本社会そのものの象徴であった。

詩「父の顔」¹は、血縁の父の顔の皺にいたるまで凝視して、そこに過去の痛ましい労苦の歴史をみるとともに、父の顔に刻まれた労苦をたどることによって、薄暗い封建制の向からやってきた明治社会の歴史をもみている。そして、自己の「老いさき」⁴

も、やがてそこに没して父とおなじ命運をたどるのではないかと
 という恐れも表現している。

とするこの言葉は、現在に至るまで、光雲と光太郎を考える上でよく
 言われてきたことである。光太郎にとって日本というものが具象
 化された姿、芸術家という、光太郎が留学先のパリで見たそれでは
 なく、光雲は木彫り職人という日本の存在をそのまま象つたもので
 ある。しかし、光太郎はパリの芸術家に対する職人としての父や日
 本を低く見ていた、ということではない。「出さず^{註3}にしまった手紙の
 一束」の

僕には又白色人種が解き尽されない謎である。僕には彼らの
 手の微動すら了解する事は出来ない。

とあるのは、彼がどれほど芸術家の存在にあこがれ、西欧のような
 ハイクラスの社会を夢に見ていたとしても、それは、適わぬことで
 あり、果たすことが困難なことを意味し、彼が江戸の、「昔からの
 伝統を継ぐ彫り物師の息子であり、極東にある島国の人間である」と
 いうことを否定しきることは出来ない」のである。そのようなこと
 は光太郎自身が一番知っていることなのに、なぜ光太郎は自身が分
 かっていることをあえて語るのだろうか。

光太郎が感じた疑問とは文化の異質さではない。詩「根付の国」
 (大3・10)「のつばの奴は黙つてゐる」(昭5・8)に表されている
 父の持つその「典型的な職人」の気質であり、人柄なのである。光
 太郎は「父との関係」の中で「職人としての美質と弱点を備へてゐ
 た」としている。それは、彫り物師としての父光雲の技術は、ある

程度光太郎は認めていたし、その職人的な父の存在も全くは否定し
 ていなかったと思う。しかし、光太郎にとって、物を作り出す時の
 その人物の意識が何よりも重要であつたと思う。光太郎の言葉で言
 えば「生命」を内に持つものでなければならぬのである。そういつ
 たものを作品の内に持たせるためには普段から作り出す側の意識の
 高さが重要である。

「芸術鑑賞その他」(大8・11)には

芸術の鑑賞があまり特別扱ひされてゐる間は本当の芸術が本
 当の位置に立つことはあるまい。芸術家の心を心とする事が万
 人の喜びとなる時が来なければならぬ。人間の生活の煎じつ
 めた結着のものが芸術の中にある事を人が皆承知する時が来な
 ければならない。

とあり、この文章の後には

今日の一般人の精神生活がもつと強く、活発に、微妙になつ
 てゆかなくては困る。むしろもつと精神生活を持つ様にならな
 くては困る。

とある。今までの日本にはなかった角度からの光太郎の切り込みは
 決して日本人の芸術における質の高低などではなく、因習に囚われ
 る従来の物の考え方からの脱却に他ならない。そうした目を開かせ
 ることが彼にとって重大なことであつた。北川太一氏は「父の顔」
 についてこう語っている。

恐らくそのでき上がった作品に対座し、ひそかに自己の生来を
 顧み、深く自己を限定する資質に思いをひそめ、来るべき生涯へ

のある予感をもこめて書きつづられたものであつたらう。この時、光太郎は最も失意の底にいたことができる。

また、北川氏はこうも言う。

西欧で得たと信ずる近代の人間としての自覚と、己の出生の規制するものとの相反と親和と。光太郎の中で必ずしも優れているとは言えないこの詩には、生涯を貫く重大なテーマが歌われ、かつ予告されているように思われる。

光太郎のこのような態度は、留学が大きな要因となっているだろう。「^{注8}今考へると、僕を外国に寄来したのは親爺の一生の誤りだった。」という光太郎の言葉からも分かることである。しかし、それは単なるきつかけに過ぎないと私は見ている。何よりもまず、彼の中に彫り物師の家からは生まれる筈のない、違う目を持った異質な何かがあるに違いないのだ。光太郎が「祖母からの遺伝かもしれない」と感じているその文学的な見方そのものが、この父との関係を作り出してはいないだろうか。請川利夫氏はこう語っている。^{注9}

光雲は殆ど本などもっていなかったようで、美術学校教授という役についてから父は父なりに必要に迫られて勉強していたようで写本などからも、その様子が伺われると云っている。以上のように職人上りの父親と光太郎の間には知的意味での交流と云うべき関係は全くないものと考えてよいと思われるのである。

そのため光太郎は、その文学的要素をいろいろな物によって導き出すことになる。少年時代から本が好きで書物を読みふけったり、

青年時代は俳句を作って新聞や『ホトトギス』に投稿、与謝野鉄幹の新詩社に入り、『明星』に簞碎雨の名で短歌を発表したり、友人の水野葉舟に書習ったりと幼い彼を取り巻いていた「彫刻の環境は、文学の幅広い環境へと変わっていった」のである。しかし、それらが光太郎の文学的なものを芽生えさせたのではなく、文学的な見方を増していくステップでしかない。高村には初めから文学的なものを見分け、自分の内に取り込んでいこうとするものがあつた。彼が文学的なものを選択したのは偶然ではない。彼の血の中にあるもの^{注11}が、彼にそれを選び出させたのである。それが「すぎ」の血であり、姉「さく」の存在としての血なのである。北川太一氏は「すぎ」と「さく」の光太郎に及ぼした影響として次のように語っている。

十六歳でなくなった光太郎の姉咲などはそのしついで幼児から学問を好み、祖母にまねて百人一首を記憶したことが伝えられているが、祖母の影響は、尊敬していたこの姉を通じて、光太郎に及んだであろう。知られている範囲で、文芸にかかわりを持ったのは祖母一人であり。兼松を感化したという祖母からのよき遺伝は光太郎にとって無視し得ない。この香具師の頭の家^{注12}に祖母の持ち込んだある高貴なものへの志向は重要である。

先程も述べたがまさしくこのことが、このような文芸に関わりを持った血が、文学的興味を引き起こしやがては、日本の象徴としての父光雲との関係に発展していくのである。これは光太郎の中に流れる彫刻家としての造形の血と祖母から姉を通じて得た高貴なものを感じる血の葛藤なのではないだろうか。いわば運命としかいいよ

うのないこれらの血の出会いと葛藤を光太郎は直感で見極めていたのかもしれない。それが「父の顔」に語られている。「あやしき血すぢのささやく声……」に象徴されていないだろうか。「二三」につづく

注1 「父の顔」(「スバル」 明44・8)

注2 吉本隆明「高村光太郎」(『現代日本文学講座11 詩』三省堂 昭

37・12) 引用は『高村光太郎』講談社(平成3・2)に拠る

注3 「出さずじまつた手紙の一束」(「スバル」 明43・7)

注4 「父との関係」(「新潮」 昭29・5)

注5 高村の著作に多く見られる語で、高村が芸術を考えると根本に置いていた言葉とみられる。「生命」「ラヴィ」「生」「生」と様々だが、本論では「生命」とした。

注6 「芸術鑑賞その他」(大8・11)

注7 北川太一『高村光太郎』アムリタ書房・星雲社(昭58・4)

注8 同注3参照

注9 請川利夫「光太郎氏にみられる『家』の影響―特に父光雲との関係―」(『高村光太郎論』所収 教育出版センター 昭和44・4)

注10 水野葉舟(一八八三年4月9日―一九四七年2月2日) 詩人、歌人、小説家、心霊現象研究者。本名、みちたろう 盈太郎別号蝶郎。新詩社に入り、詩文集『あららぎ』窪田空穂との合著歌集『明暗』で登場。

光太郎とも知り合いで終生の友であった。

注11 同注7参照